

基礎研  
レター日本の母子保健  
低出生低体重児(2)

—出生体重 2,500g 未満の低出生体重児は、男児よりも女児、単産よりも複産、母親の年齢 45 歳以上で高い割合—

生活研究部 研究員 乾 愛  
(03)3512-1847 [m-inui@nli-research.co.jp](mailto:m-inui@nli-research.co.jp)

## 1—はじめに

日本では、出生体重 2,500g 未満で出生する低出生体重児の割合が 1980 年代頃から増加傾向にあることが指摘されている。また、低出生体重は成人後期の生活習慣病との関連性が指摘され<sup>1</sup>、妊娠前の母体の体格（BMI 等）が低出生体重児の出現頻度に関与する研究結果も報告されており<sup>2</sup>、母体となりうる成人期の健康管理の重要性が伺える状況である。

[前稿](#)では<sup>3</sup>、低出生体重児の現状を整理し、2019 年の低出生体重児は 81,462 人と、出生総数 865,239 人うち 9.4%を占め、1975 年の 5.1%からおよそ 4.3%pt も上昇していることが明らかとなった。

続いて、本稿では、厚生労働省の人口動態統計のデータを用いて、低出生体重児における子どもの性別、出生児数（単産・複産）による差異、母親の年齢による属性別の特徴を整理した結果を示す。

## 2—低出生体重児における属性別の特徴

## 2-1 | 子どもの性別

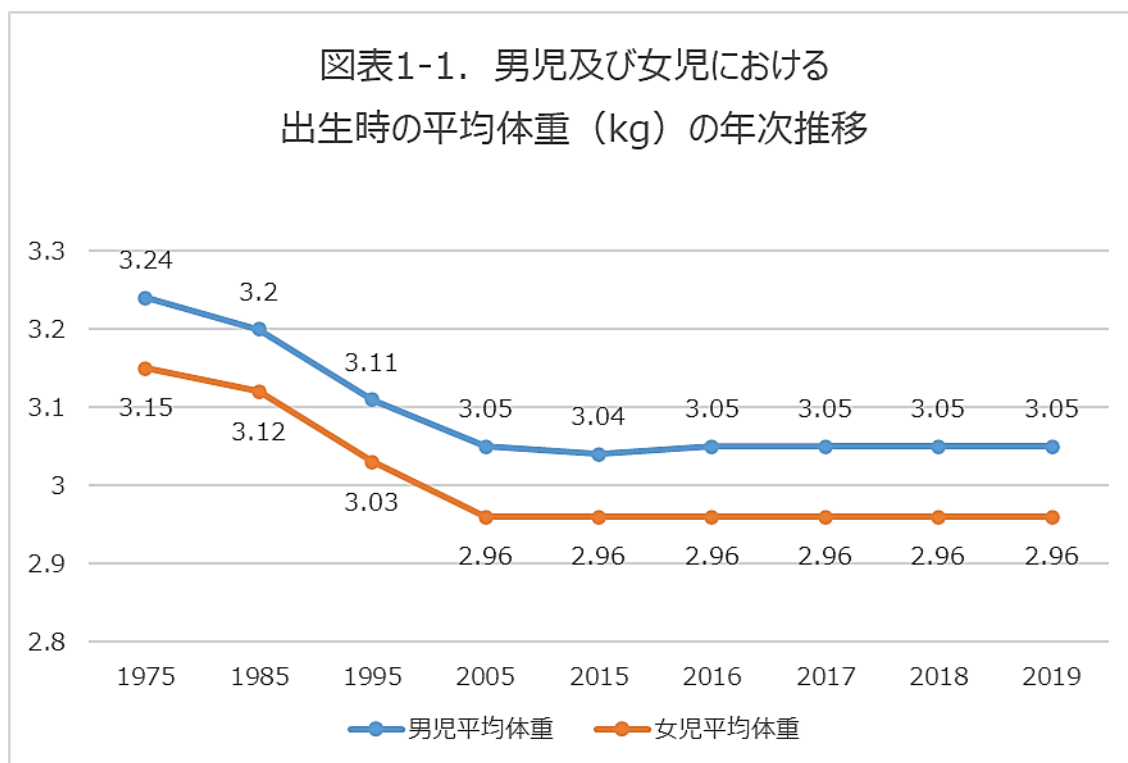
子どもの性別（男児・女児）による出生時の平均体重について図表 1-1 へ示した。2019 年時点における男児の平均体重は、3.05 kg、女児は 2.96 kg であり、どの年次においても女児よりも男児の平均体重の方が上回る結果となっている。また、1975 年時点と比較すると、男児は、0.19 kg の減少、女児

<sup>1</sup> 国立成育医療研究センター（2023）“Association between birthweight and prevalence of cardiovascular disease and other lifestyle-related diseases among Japanese population: JPHC-NEXT Study” *Journal of Epidemiology*, [https://www.istage.jst.go.jp/article/jea/advpub/0/advpub\\_JE20230045/pdf-char/en](https://www.istage.jst.go.jp/article/jea/advpub/0/advpub_JE20230045/pdf-char/en)

<sup>2</sup> エコチル調査北海道ユニットセンター（2022）“Severity of low pre-pregnancy body mass index and perinatal outcomes: the Japan Environment and Children's Study” *BMC Pregnancy and Childbirth* volume 22, Article number: 121 (2022).

<sup>3</sup> 乾愛、基礎研レター「日本の母子保健低出生低体重児（1）—2019 年の低出生体重児が占める割合は 9.4%、1975 年から 4.3%pt も上昇—」（2024 年 1 月 30 日）  
<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=77379?site=nli>

も 0.19 kg の減少傾向が認められている。



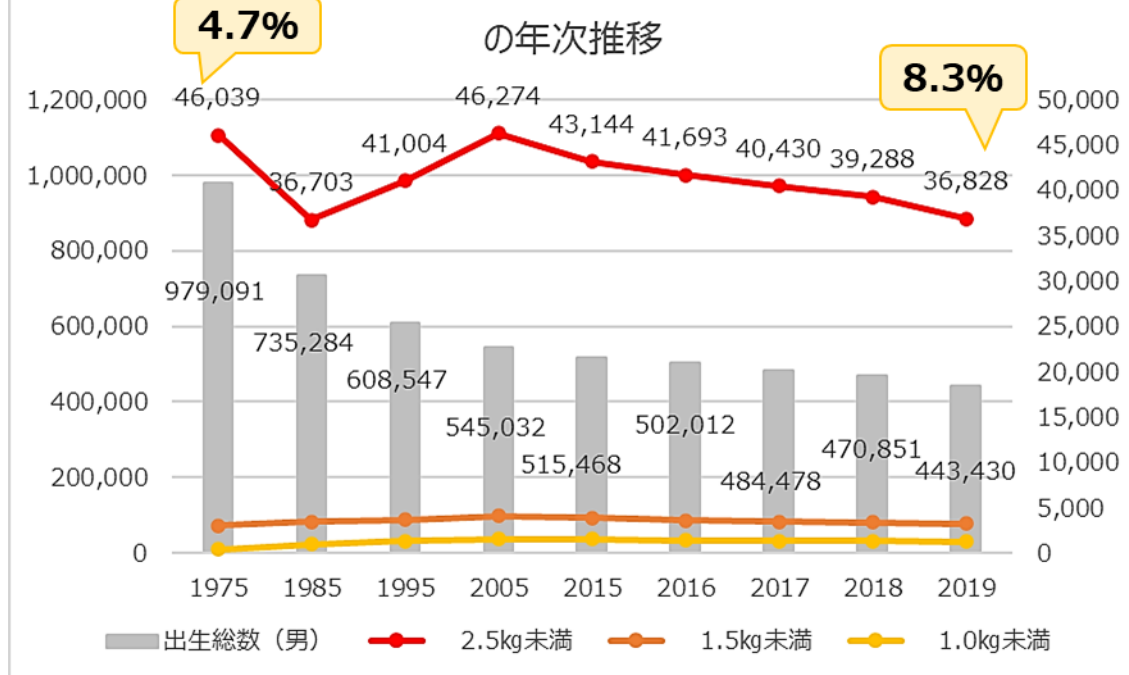
出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢(5歳階級)・性・単産-複産・年次別 -昭和50・60・平成7・17・27～令和元年-】を基に、筆者作成

次に、男児の出生総数及び低出生体重児総数の年次推移を図表 1-2 へ示した。2019 年時点において 2,500g 未満で出生した男児は、36,828 人と、1975 年の 46,039 人と比較すると数自体は減少しているものの、2019 年時点における男児の出生総数 443,430 人のうち 8.3% を占める割合であることが分かる。1975 年の 4.7% と比較すると、3.6%pt も上昇していることが明らかとなっている。

続いて、女児の出生総数及び低出生体重児総数の年次推移を図表 1-3 へ示した。2019 年時点において 2,500g 未満で出生した女児は、44,634 人と、1975 年の 50,928 人と比較すると数自体は減少しているものの、2019 年時点における女児の出生総 421,809 人のうち 10.6% を占める割合であることが分かる。1975 年の 5.5% と比較すると、5.1%pt も上昇していることが明らかとなっている。

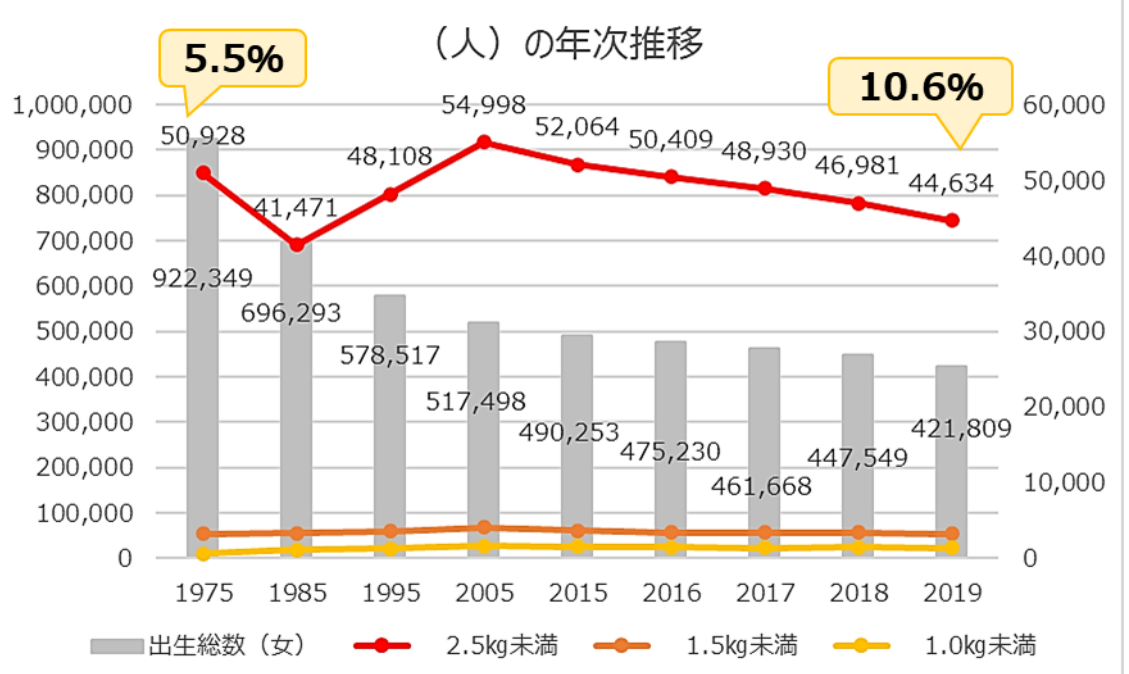
これらのデータから、低出生体重児の割合が男児より女児の方が若干高いものの、いずれの年次においても出生児の平均体重について女児の方が下回ることから、男女の性差による体格の違いが影響しているものと判断ができる。

図表1-2. 男児の出生総数及び低出生体重児総数(人)



出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢（5歳階級）・性・単産・複産・年次別 -昭和50・60・平成7・17・27～令和元年-】を基に、筆者作成

図表1-3. 女児の出生総数及び低出生体重児総数

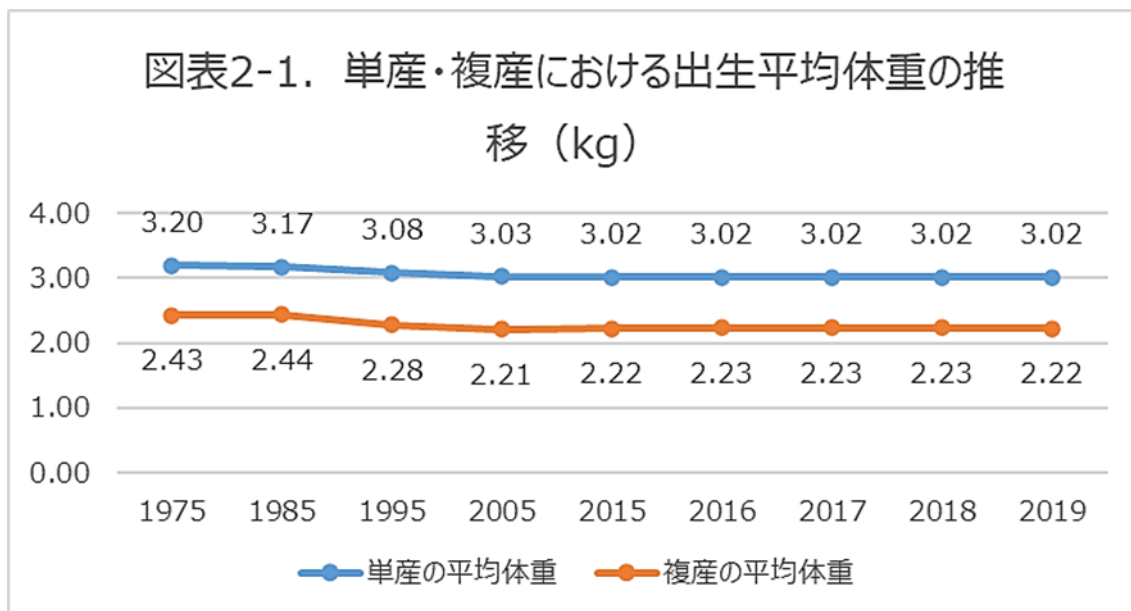


出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢（5歳階級）・性・単産・複産・年次別 -昭和50・60・平成7・17・27～令和元年-】を基に、筆者作成

## 2-2 | 単産・複産

次に、出生児数の違い（単産か複産か）による低出生体重児の割合の差異を図表 2-1 へ示す。尚、単産とは単胎で生まれた出生であり、死産は含まない。また、複産とは双子・三つ子等多胎で生まれた出生数であり、死産は含まない。

単産・複産における出生平均体重の推移を図表 2-1 へ示した。2019 年では、単産の出生平均体重が 3.02 kg に対し、複産の出生平均体重は 2.22 kg と 0.8 kg の差が認められた。また、1975 年から比較すると、単産の出生平均体重は、0.18 kg の減少、複産においても 0.21 kg の減少傾向が認められている。



出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢(5 歳階級)・性・単産・複産・年次別 -昭和50・60・平成7・17・27～令和元年-】を基に、筆者作成

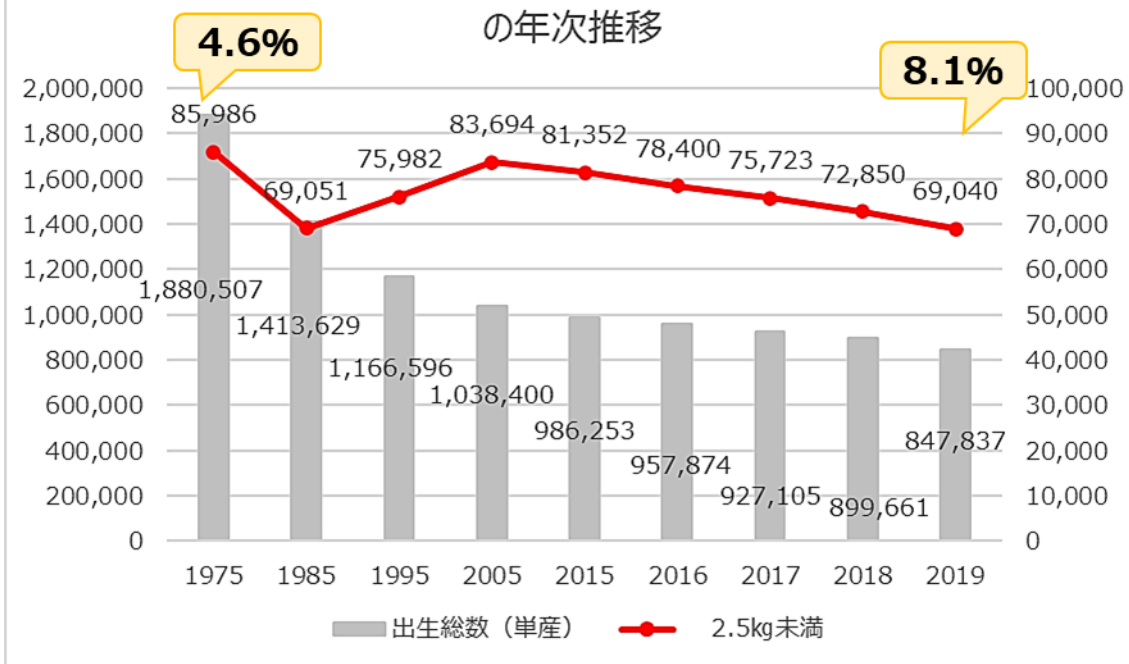
次に、単産及び複産における出生総数と低出生体重児数の年次推移を図表 2-2、図表 2-3 へ示した。

2019 年における単産の低出生体重児数は、69,040 人と単産の出生総数 847,837 人のうち 8.1% を占めていることが明らかとなった。一方で、2019 年における複産の低出生体重児数は、12,422 人と、複産の出生総数 17,402 人のうち 71.4% を占めることが明らかとなった。

また、1975 年から比較すると、単産の低出生体重児の割合は、4.6% から 8.1% と 3.5%pt も上昇し、複産における低出生体重児の割合も、52.5% から 71.4% と 18.9% も上昇していることが明らかとなった。

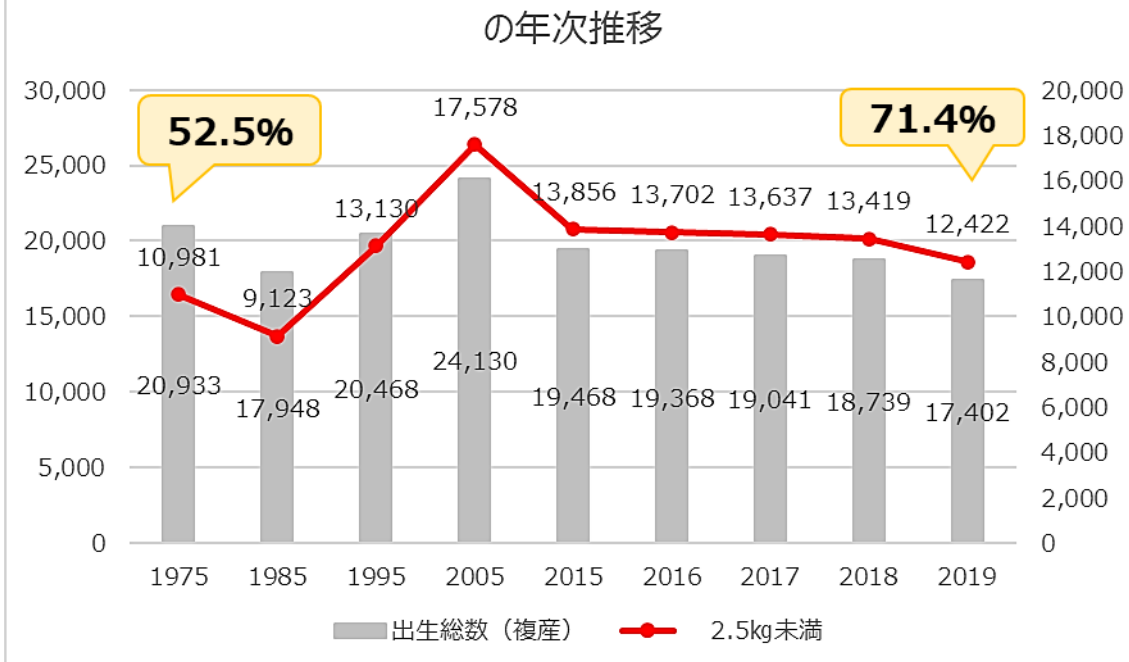
一般的に、双胎以上の多胎妊娠では、限られた子宮内で母体とつながる胎盤領域の大きさに差が生じる場合に、体重の差が生じることが知られており、子宮内である程度の胎盤の大きさを確保できる単産よりも、複産、つまり双胎以上の多胎児の方が低出生体重児の割合が高くなりやすい。本データの出生児数の差異による低出生体重児の出現割合についても、多胎児特有の成育環境が影響している結果であると考えられる。

図表2-2. 単産の出生総数及び低出生体重児数（人）



出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢（5歳階級）・性・単産・複産・年次別 - 昭和50・60・平成7・17・27～令和元年 -】を基に、筆者作成

図表2-3. 複産の出生総数及び低出生体重児数（人）

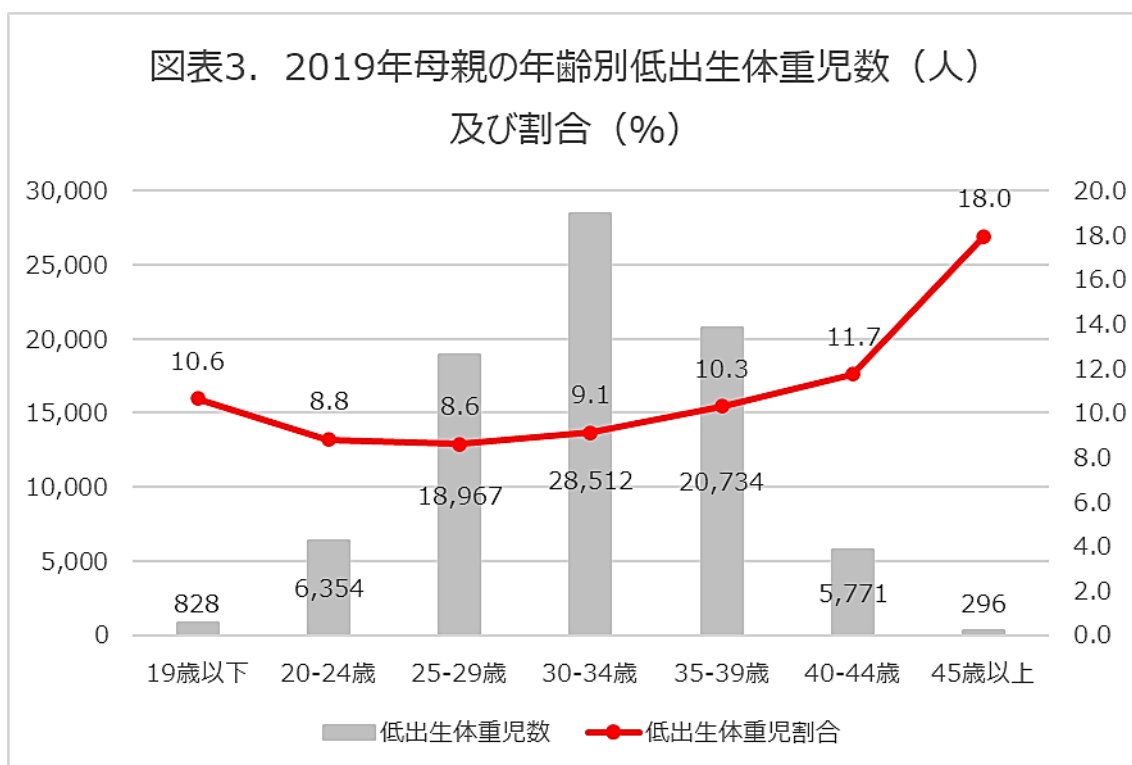


出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢（5歳階級）・性・単産・複産・年次別 - 昭和50・60・平成7・17・27～令和元年 -】を基に、筆者作成

## 2-3 | 母親の年齢別

最後に、母親の年齢別の低出生体重児の占める割合を図表3へ示した。2019年における母親の年齢別低出生体重児総数では、30-34歳において28,512人と最も多く、次いで35-39歳の20,734人、続いて25-29歳の18,967人であった。一方で、出生体重2,500g未満の低出生体重児が占める割合を母親の年齢別にみると、45歳以上の18.0%が最も高く、次いで40-44歳の11.7%、続いて19歳以下の10.6%と、高齢及び若年出産において低出生体重児の割合が高くなっている特徴が見て取れる。

いくつかの研究<sup>4,5)</sup>においても、母体年齢が35歳以上や40歳以上の初産婦である場合に、低出生体重児の割合が有意に高くなるという報告があり、本稿のデータの特徴とも合致する。母体の年齢が高齢になるほど、妊娠糖尿病や高血圧のリスクが上昇することで、胎盤機能低下や胎児への栄養供給不足等になることが指摘されており、また、高齢であるほど正期産である妊娠週数37週未満での早産のリスクが高まることから、胎児の体重が十分に増加しないうちに出生を迎えることも低出生体重児の割合増加に影響していることが推察される。低出生体重の一要因として、母体の妊娠・出産年齢が関与することは重要な視点である。



出所：厚生労働省人口動態統計令和3年【15 出生数，出生時の体重；出生時の平均体重，母の年齢（5歳階級）・性・単産・複産・年次別 - 昭和50・60・平成7・17・27～令和元年 -】を基に、筆者作成

<sup>4</sup> 国立保健医療科学院（1995）「妊婦年齢の早産及び低出生体重児」

<sup>5</sup> 内藤美智子ら（2019）「妊婦要因と低出生体重児，流産・死産児の関連性」日本公衆衛生雑誌第66巻第8号，p397-406.  
[https://www.istage.ist.go.jp/article/jph/66/8/66\\_18-085/pdf](https://www.istage.ist.go.jp/article/jph/66/8/66_18-085/pdf)

### 3—まとめ

本稿では、低出生体重児の現状及び属性別の特徴を明らかにすることを目的に、厚生労働省の人口動態統計のデータを基に整理した。

その結果、男児よりも女児の方が出生体重が低く、低出生体重児が占める割合も女児の方が 2.3% pt も高いこと、単産よりも複産の方が出生体重が低く、複産の出生のうち 71.4%が低出生体重が占めていることが明らかとなったが、いずれも、性差による体格の差や多胎による胎盤領域の差による影響があるものと推察された。

しかし、母親の年齢別に占める低出生体重児の割合をみると、45 歳以上の母親で 18.0%と最も高く、先行研究でも 35 歳以上や 40 歳以上の初産婦において低出生体重児の割合が有意に高くなる傾向を示すことが明らかとなった。母体の年齢が高齢になるほど、妊娠高血圧症候群や妊娠糖尿病など妊娠合併症のリスクが高まり、胎児の体重が十分に増加しないうちに出生を迎える早産のリスクも高まることなどから、低出生体重児の割合に影響を与えることが推察された。

近年の晩婚化晩産化傾向をみると、今後も高齢妊娠・高齢出産が増加することが予想される。低出生体重のリスクを見越した母体管理の重要性がより一層重要視されるべきであろう。